

札幌・門田ピッケルの回想録

高澤 光雄

門田茂と日本山岳会

門田ピッケルを製作した門田茂は昭和四六年七月に日本山岳会に入会した。会員番号は七一九七番。推薦者は本部の藤井連平常務理事と北海道支部の中野征紀支部長であった。当時、門田ピッケルの販売店だった秀岳荘の金井五郎社長も北海道支部の会員だったので、金井氏の薦めで入会されたものと思う。

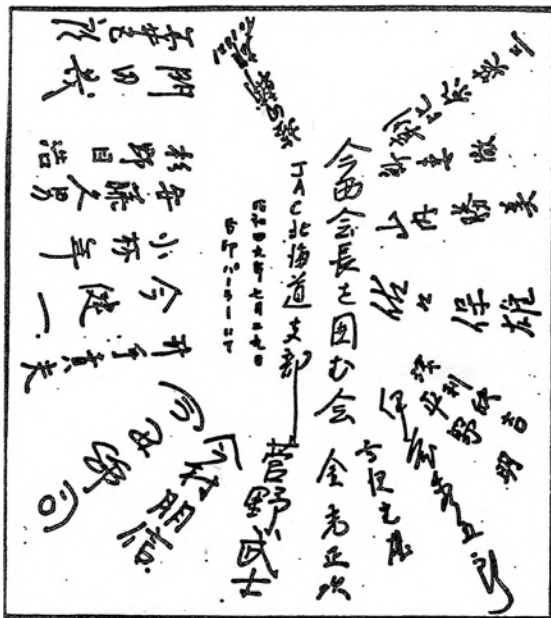
昭和四九年七月に今西錦司日本山岳会会長が来道し、札幌岳、樽前山、夕張岳、カムイエクウチカウシ山、樂古岳に登り、二九日に札幌に戻った。

た。その夕刻、札幌駅前通の雪印パーラーで「今西会長を囲む会」が開催され、茂も参加。他の参加者とともに色紙にサインをしている（写真左上）。このとき今西会長は茂を初めて知り、ともに歓談した。

門田ピッケルの誕生

昭和五五年八月二〇日から九月二日にかけ「北海道新聞」夕刊に「〇回にわたって門田茂 ピッケルと私」が連載されたので、要点を抜粋して紹介しよう。

門田茂は明治四三年に樺戸郡浦臼村で鍛冶屋の次男として生まれ、大



正一年に札幌市（現在の中央区南一条西二丁目）の鉄工所に転居。山鼻尋常高等小学校を卒業し、父の直馬に仕込まれながら農機具専門の鍛冶職人として働いた。

昭和四年二月、北大工学部学生・和田弘一が、おかしなものをぶら

さげ「これと同じようなものを作れないか」と訪ねてきた。靴の底に着けるものだそう、三ヶ位の鋭いツメが八本、下向きに付いている。アイゼンというもので、硬い氷の表面を登るときに着けるのだという。国産品がなく舶来品を使っているが、値段が高いので、安く作れないかと町中の鍛冶屋、鉄工場を歩き廻って、門田のところへやって来たのだった。

外国人に作れるのだから、日本の職人に作れぬはずがないと、茂は父とともに地金を焼きはじめた。それからが大変で、和久田は毎日のように山岳部の学生連中を連れて、ああでもない、こうでもないとい実にうろたえている。茂は「理屈か、鉄のことは俺にまかせておけ」と負けん気で頑張り、苦心の末、一カ月余りかけて日本初のアイゼン七足を納めた。その冬、北大山岳部の十勝岳周辺での合宿で使用され好評だった。

翌昭和五年七月、和久田が再度世界の一級品シェンク（スイス）のピッケルを持ち込んで、製作を依頼された。複雑なアイゼンよりもピッケルの方が作りやすいと判断し、素材はニッケル・クロム・モリブデン鋼を使用。約一千度から八百度の火床で鋼を焼き、父とともにハンマーで相打ちする。これを三十数回繰り返して、鋼をピッケルの寸法に合わせる。シャフトは

門田茂



野球のバットと同じヤチダモの木を用い、先端のハーネスとシユピツェ（石突）も鋼を用いてピッケル四本を製作した。「門田ピッケル」の誕生である。ピッケルは日本では、仙台の山内東一郎が二年前から作っていた。

海外遠征と門田ピッケル

最初にピッケルを提供した海外遠征隊は、昭和二年にナンダコート（六八六一メートル）に遠征した立教大学登山隊。その時、茂はヒマラヤの氷壁に自分の作ったピッケルが耐えられるかどうか心配で夜も眠れなかった。見事、初登頂に成功し、一層自信を

つけることになる。

昭和一六年に太平洋戦争が始まり、鉄金属節約のためピッケル、アイゼンは禁制品となり製造中止。茂は昭和一八年から二年間出征し、北千島に赴く。

昭和二九年に父・直馬が病死し、昭和三年に琴似町（現在の西区）山の手に工場を移築。同年日本山岳会がヒマラヤの八千メートル峰マナスルに挑む登山隊のピッケルを製作。やはり同年の第一次南極観測隊は、門田のピッケル三〇本、アイゼン四〇足を持つて行つた。普通鋼は零下五、六度で変質してもろくなる

が、門田製は特殊鋼なので頑丈である。

「北海タイムス」昭和四二年一月五日付では「世界の山カドタ・ピッケル 幾多の高峰征服」と大見出しで「昭和三年七月、京都大学チヨゴリザ登山隊（一行二〇人）の一員芳賀孝郎さん（三二歳・札幌市北五西一九、芳賀スキー店）から当時門田さんに宛てた手紙の文中に『私のために特に作つて下さいましたピッケルは、非常に調子よく、多くの困難の突破に大いに役立ちました。山ではアメリカ隊およびイタリア隊と会い、日本隊の装備の話になり、日本のピッケル、アイゼンの優秀さに驚いていました』世界の山男がほめたたと、つづられている」。また「このピッケル一本は国内では九千八百円、外国では二万五千円はくだらない」と登山家たちの間で評判になっている。「メイドイン・サッポロ・カドタ」の存在は道産の誇りである」と締め括っている。

門田ピッケルの終焉

私はまがいもののピッケルを仲間から譲り受け、昭和五〇年元旦に愛山



銘は「Summit」「札幌門田秀岳荘」と刻まれている。

筆者の所持する木製シャフトの門田ピッケルは、身長に合わせて全長 70 釐、ヘッド長 27.5 釐。
昭和 51 年最後の作。

溪温泉から愛別岳に登山中、シャフトが折れ、危うく滑落するところだった。翌年、秀岳荘から「札幌門田・秀岳荘」刻印入り、二つ穴空きのサミット・アタックを購入（写真右下）。昭和五二年二月三〇日から翌年一月二日にかけてこのピッケルを使い、

札幌山の会の仲間六人で、当時未踏だった日高山脈・神威岳南西尾根を初登攀した。

シャフトにヤチダモを使用したこのサミット・アタックは門田の最後のウッドシャフトの市販品で、当時はまさにこの製品の最盛期だった。ヤチダモは昔は札幌近郊でもたくさん自生していたが、その頃には材料不足。集められた原木は見た目はきれいだ、耐久力がなければシャフトの役目は果たさない。使えるものはわずかで、入手困難となっていた。

昭和六〇年に日本山岳会は創立八〇周年を迎え、記念として、門田マーク及びJACマーク入り、ニッケル・クロム・モリブデン鋼、シャフトはタモ材を使ったピッケルを限定百本で予約募集した。それが予想外に希望者が多く五三二本もの申し込みがあった。茂は日本山岳会会員でもあり、断る訳にはゆかず製作に励んだ。しかし翌年、茂の後継者でピッケル職人三代目にあたる門田正が病に倒れ、JAC刻印入りピッケルは三三五本を完成させて打ち切り、茂は廃業を決意した。平成一〇年二月三日、茂は札幌市で逝去、享年八九歳。

今に生きる門田ピッケル

門田第一号ピッケルは和久田弘一

から門田へ、そして札幌オリンピックでスキージャンプ競技が行われた大倉山シャンツェの下にある札幌ウィントースポーツミュージアム（現・札幌オリンピックミュージアム）に陳列されていたが、現在は収蔵庫に保管されている。

平成三〇年五月、私は門田ピッケルの調査のために札幌オリンピックミュージアムを訪れたが、何とそこに、新妻徹元日本山岳会北海道支部長が平成二四年九月に寄贈したピッケルがあるのを見つけて驚いた。昭和二六年作、全長八四・三センチ、ヘッド長三〇センチである。

新妻元支部長は昭和二五年に北大山岳部に入部。このピッケルを使用して昭和三五年一月に天塩岳からウエンシリ岳、昭和三七年二月、三八年一月に知床岳から羅臼岳を縦走。そして昭和五三年二月から平成二六年四月にかけて、宗谷岬から襟裳岬までの北海道主脈縦走を成し遂げている。

現在のピッケルはシャフトが木製から金属製に変わり、登攀目的に応じて多様化され、急角度のピック、短いシャフトとなっている。一世を風靡したウッドシャフトは、今や日本刀の名刀の如く珍重され、研究者やコレクターが収集し、往事がよみがえっているのは喜ばしいことである。